風人のかゞみ　冬

特別
へ4
7351
4

特
へ4
7351
4

56-4044

早稲田文庫

秋冬

秋も八十日前よりのみをもちさきて五三日乃
人をたゆしにむべし四日乃氣も今頃ハ
なかしく宮え乃ちとしきもいとすゝし
志らせ乃まし乃このすゝも萩みてむてすの影
霧すえてひまにしくふかき山里ハさびしき水
もみぢ氷さまし人目守もつかれ乃萩乃さ道

ミゝ枕詞と思ひをりてなむよミきこゆ乃しかし
かつて論ありし事なれど風乃音聲ならぬの
風をいふなる　山風もきのふ又増けしに嵐
例ならば例なく乃吹ふ　陳を月志ゝ且らむ書
今ゆりは春乃花におしなる　翁よりは
まゐらにあらき山風　芽乃名に結ひし春も
しもこはぬ　光る乃なもしまであらる　小山風を

をらぬ　名所ハ高根山　山風乃おとハ乃　あらし山
山をなをる
山乃ゆりしたりしき　ひとつのふうにゆ　部たりゐる　宮を濡らう
あかをとも隔てし　仙堂へし
野山海川みな其乃名所なきもよりは陳所にまう
せてよむへし
き乃ちなみ歌ハらき逢しらに川乃やみに嵐寄乃氷落ぬ
らん
山川しもみとや今朝乃時雨が寄ら山あはらに紅葉秋乃
色こそれ
春乃きて時雨る時そ錦おる山乃杜の木乃ゆゑなりかゝる

音もなく梢をそむる山風の今朝よりハいとゞ身にしむ哉

深つゝむ山乃錦乃ちしほ衣にうつして見ハまさりけり　らん

粧ひもまさる紅葉の梢あるの夕暮も猶あかぬ遊

人乃心にしみて紅たる乃空乃雲の色を吹送る風の

山乃はに雲の行かふ嵐乃音ハ秋乃ゆく景色見

紅葉乃音をも又なく立て又も降る比ハ寒けれ

時雨

時雨ハ十月朔日より降れよかし多く降る故に冬を

たのむ時雨と言ふ也さまざまにかきくれて

定なく急雨ハ時雨ハ必山風吹きて掻きくもれハ

風もなく空もさだめなし　時雨乃夜の定めなき

を世乃つねなしと人ハいふなる　時雨

乃雲さだめなき冬の夜の雨ハ乃しぐれ

冬さむき頃や乃しぐれ乃音さびし

ゆめこゑを經めくらし又ハ木乃ハのちる音
乃こゑにまさるを松風乃こゑとハ松吹風の
こゑ乃音にまさるを 山乃ためなるむしこゑ
山風よりこゑ乃うちまよ こゑのうちなるこゑハ
こゑ乃山乃木 志ゝこゑをきこゆる嵐 山乃木
もゆる大こゑ 小山風よりこゑ乃 風乃木
てんしるゑ 風そよぐ松風をとゝ 風さわぐ

しきこゑてふ 松吹風のひゝきこゑ 志られ
しらく 禪定の月 しこゑるかゞき月清しく
あらかふ めぐる月 みちもさえわたりしこゑ 秋
やま乃上に音ありて なや乃松ぐにゆかる
しこゑ 音にきく なくそをめしれ めしぬ
しこゑを聴めたる 本乃音にさまず 歳夜
ゐ茂かゝ佗ゝれ 秋是乃夜を聴めくれ

なまくも辺る村し里 歳めまり志くろく色
名所ハうつきぬ いとまぬ つろ乃稀秋
又乃らし山 ら河ら山 と宝山 赤染れと
そ外ら河くはもよりほま名所を求す
まだ杖をめてきし道の秋乃夜や乃秋え此筑是 ゐ
こ山乃し道て渡数よにりて渡しき置う八乃
かよう川くりは空き秋そて乃陀郭しね附夜なり

はるふる旅路乃旅の小春し空とかろ旅人ものめく (そて汎)
木のく霰朝さま此風やさぶかろん里に出むせ汲の (そうう)
むらう鳥乃渡や良夜路人は夜に今のあま消の有
博乃国の里田乃まり此冬な道雅ハめりせし人の足く
深まり汲の (志のこ) 枝乃もりの冬里よ数もそかの色元 (こんとん)
むら里そる村家の年月より日暮となり冬き乃山也
いのちのせ今納し里乃吉野山秋と詠よなる あ子り

ねくに年も寿して長生乃国の松乃八千とせと寿く
神楽殿や大松か枝のとうに祝めてたく目出度
松栄る国乃松まつ乃神年も月に添ふてめでたし
ころ衣ながくきめでたく栄え 祝めでたし 目出度く 千代
まつり繁栄乃陽にひらきて目出度めでたき寿徳
一年に乃千代乃寿め瀬川乃たくさんなり
祝めでたし此のいとの千代松風乃声も目出度かりけり

落葉

冬ハ秋乃山のもみぢも山風にさそひてちりみだれ
るるもみぢハ梢まばらになりけり錦をあらひ風乃行衛
にまよひて京にみさそふハ都会にまよひ嵯峨乃
もみぢ葉の散るを浦人乃かよふせせ舟のよそほひ
八舟を筏とも浮世の三田川に八流れもせきとめ
いろいろみ立大井川に八千代にいろいろもかれ

むかふにハきしのもみちハ浪をかけ水
ハ流にも又ハ庭のもみちハ谷の道て今ハふかく
たかねハ今ハ分る跡なしも落葉ハ秋より散く
ちる人をともし打こゑ庭にてハ色の染めし又色の
ハしらとのたよりもなり
山落葉ハ山風に木の葉乱れて　山風ハ梢ハ
色にもみち頃ハさそひて山ハさひし　かはしにける

もみちむ　山風の木の葉をつれに吹ける
山を埋める里にちりけり　山もかくハ木の
ちらぬ　山のはの松をのこしてちるもみち
庭こしハ人もなく　庭の落葉もつもる
庭の落葉に風さそふ　庭の雨も錦をる
庭の落葉に小さく散る　庭の雨にて木もなみ
もみちて　庭のこのもち錦しく

水邊とハ　山川なとをうつすこゝろなり　水の
なかれもみな其によりてよめる　海邊にハ川をも名
川なとのまもあつかひのみちなり　池水なとのうへに
まし題のみちの詠てなかるゝ　歌にする川波ハ流れ
よせたるしかるへし　池の岸にあたりてすゝ
末のかたにしるへき也　このみちを考て見るに
岸の上につゝきたる歌也　野辺にそへたる海の白
いと

橋とハ　このみちをよハ川なとし　山風をかよふの
うけたしのみちすゝ　古來　自然よくさる
のみちなり　末の野辺に渡　時雨の音たま
きこゆるめにかよふの　名所にこのみちの名所
にも是を用へき也
このみちの末の野にかよひて旅の床に歸ゆく
気色ハまた嵐の山風よりまてかたかよハ
なし

今よりハ何まち秋乃名残をしまう思ひ寄のはちは
唉つゝ白妙乃尾花の下もまた乃おほて遊ぶも夕山風
のみちそに散きの小乃秋の色をかへて吹山風ハ色
よそに見し女郎花乃梢の夕露降る道ハ露ぞ置る蕊
錦乃落葉しのよ置て嵐も吹やう雲乃落葉をも音まさるらん
霜の下乃風ふきそゆる道て時雨ふり紅葉の葉乃下道
さらひ来てのみち乃あけハ竟す文風乃ふきそゆる山川の

山川ハのみちを橋よつて見る錦乃みも見し嵐ぞ
志賀乃山のむすぶ道石ならぬ木の葉ハかぎる暮嵐の跡

和哥

萩荻薄女郎花乃色紅葉道をとふこと又ハ色の
草をふ道乃く草葉もとも又ハ枯のこと道ふこうなき秋霜
見えりさむ山まちをとめさひしくうゝひまし
おき露之又霜乃下葉よ色紅葉をとまてる叶なり

野宮ハ雖か世にあり　露よ寿遣ニ屍萩乃ハ露
うつろのこる花さくなし　露にうつゝ川花落る
てらきましてきよらか　尾花か袖にしとゝ結ふ　露
うつゝも河の流萩かし　八重むくらしけし　虾も
もえてうつろ　庭乃ようきも露つゝ　露乃秋
きゝの冷乃く泥　色道乃草まに露有流く
し秋乃さも移ゑ色草　人にも草もうつるさ

清さ　霜よ消遣乃草うつ花　みゆうせし修更霜
下草　名所ハ秋乃花よしし名所に似たり下
萩乃名所を萩乃しとかさ　尾花ともよ名
云ハうつすのころ、ちる花乃さかりきん、吉萩草ハ
いつこ渡し雪物なるハまる芸とさよも遣いつれ乃
野をも統し　てもうし　うら渡しくや
秋風乃吉のこし秋乃うしまく　露遣しまうつる姿
うさ庵

人目まれなる霜乃おき葉にのこるも淋しき庭乃色なき
冬野なからに霜菊にしほれ風乃中の小菊は残る霜菊
花の香もしほれ乃露に置て詠め哀しき乃下葉
ちる秋乃草も枯れ果てし霜まよふ野乃色なき
秋乃草もなく行てみれは霜枯乃草はしほれて寒さ
霜枯乃草の葉乃かれかれて人目も冬は見えぬ
なれは人目なく人もかよはぬ冬乃小草は霜乃下葉

寒草

寒草は池水にも氷して川音をいつしか君乃つまもと
いふ人乃通ひはたえて雪乃したに草は花もなく枯て
草乃しけみも残らぬ哀は冬の名残をとゝめく
こゝろひあし乃かよひての跡乃ありし雪の下葉も
てらし残る月乃ひかりと共に草の葉末にかゝる
見しそのはしの小草も薄く霜の氷の乃

床と行しハになりぬる人か世之の道芦にとと
入江涼しきの道芦への夏川芦の風さりく 霜
こほる行く乃道も 霜ふきたる芦乃に
波よせ来る道乱芦へ 跡さひしき芦乃かさる
芦乃かくれところほりぬ川の 波よする道 芦の根
入江乃舟の跡かく 舟道く 芦人舟も舟路
出し 芦の道八文波よせる 枯る乃葉に有

さゆる 夜行吉乃水鳥 芦の下折く 寄波
る芦の道く 波のうきひらあらハる 名所を
難波江 鳴つる舟有 こしもたに 鳴有 舟 つなの
乃らし つかしく 江乃入江 大井川 行きの
宇治川 舟 波有 手を
難波入江よ 夜名清のころも涼し 芦の村さわ
難波江の芦乃下折く 和歌の道八孔て浦風を吹

萩かにのこる花へ過ぎにして露ばかりも秋風のおとき
わかれく萩子の露をわか花をたにおの心の音も淋しき
咲く程を風にちらく萩の花の入江へのこゝろせよ者もなし
暮ゆく野の花乃こゝろ風まかりにしてたゝる哀れ

秋野

秋野ニ八千草と共にも見えしに文八の乃子草も萩ばかり
ちりゆく萩乃ときも深くん哉ハ秋乃花のとゝ

下葉ともしほしをれ種ハこゝろ乃道でそくのこと
小篠乃ことそ吹きはしたなき乃ことくいふ八月の秋
いふ文はゆふかの忍ふらるとも柿乃をまゆ浅けれ
花に結ひてハまりて　乗るなる道ハこゝろに結ひこゝろ哀れ
色の道て終ならぬ露も限りなく花の道とちぎれ
乃萩よ風さゆる　猶又萩又この道をはなる花乃
ゆきちにしまのいろさく　うき世乃は深く思ふる

其道の事のこゝろ小隙なくし　其道の文さへ書き給へ
し　おもれ其道ハおきく絶えにあり　まつ歌乃ちょ葉
世の人も其道をもて舞遊の道しまニ更に結ずる
なきをしら〳〵志りけり上し　夜のうちには心ひそかに修道
悠久の其道の跡をたて録ても無窮を
滋葉原ニ霜乃かゝる其道をもて秋風ひゆくかた絶へ
今ぬれハ葉末乃枝も霜りし風もえぬ原の露に深き

冬もなく落葉染めの衣ハ寿ぬ世を手紙乃のく秋乃霜かな
色もなき落葉の色乃もみぢもつ霜の風乃声もまさき
朝のおく袖の白きも道乃霜のまされ霜のさき
吹きさるも袖の霜に通て声のふる乃ちる

霜

霜ハ天下ふりくさし濃霜を結乃霜なりし
古ハ高き色をかゝる乃かゝる乃声を知りし

とよみ乃八又霞衣ニまは月乃春陽としてさ
やかなるものゝ霞衣乃雨露とは露八つまの浅乃霞
をいたひく春さりにつけきどもし娘之その外柴
すむぞしうもつゞきしてまし春風衣浮嶋しも霞
旅や乃野戸草の玉霞衣乃つまきを神無ニ守ま
ニ（狂乃蔵くと紛れくろのまゝきまの乃しあ
野け江乃つまとハ日紅よしあ霞乃いはつりとし

霞分けて八霜柳のくまつて如是八春乃と
ろせしれどしテんすゝ之霞乃紀くハ霞乃まくと
に玉つくゝせるゝ也乃中にハ空くゝ之霞ニ吹くとは
竹乃ていあき乃まに霞をやハさやくしく春乃
まものゝ玉すてに霞乃ハきとし旅しまあゝ
山ハ朱人乃初山緑乃夕霞　山人乃たきくの
とにおほしと　山陰乃昔のみるるも霞ニ雲

山路乃朝けに立まよふ　霧立深けれハ
野ハ藤分るの袖しほに　日影よりもすきの入
めくりて　あふさわけ　ゆふさりの川之　霧たちこめて　紀の
しきと立乃へ
秋風ハ　はらすよさ中る　和しか　たしか　蘭こし　庭乃露
萩りかに　露しきと立て　上に庭乃まかき
庭乃萩ちも　名残る　日影まろ　はてのしも

色ミえ乃花の露よ立しきと　此やまとハ秋
船や乃渡よりかゝくしきと
月ハ　月影もしるは氷り　月影よりも立しきと
そえの如
秋ハ　露さして船しまぬ　紀あるは秋庭乃
しも　露よをつくろひの乃へ　秋乃川る
つま風をちらし入　又秋のつま水乃ハ縁
下

木ハ遠霧りに頃をみつむる松　遠霧り
松乃みの間も所々　霧ハ高き木よこり見せぬ
梢て　梢ハくとこ木　かれハうち遠近し　ニ其松乃木の葉に残ひ
峯乃頭だしに遠つらん
竹篠霧ハ其乃末の音も響きてきこしも
遠竹乃葉分の間も　竹乃本しける　竹乃
本に霧さゆく　篠乃其きゆく　霧のたち置

夕乃声もさしこそ増れる也山ひ原の霧乃中の　ちり
篠のる姥乃木のこ其秋の部にさらひて後遠近雲　郎しも
今朝ハ其人もうよ成れとみえてかむ秋も水き霧乃松　らし
夕顔ひし葉乃葎よ所にかく霧とく今朝の　をこしたるらん
出る月葉分乃有小霧さえぬ乃日高乃是竹
呉竹乃来て遠らひて露ちるも今朝の霧
見えぬ露遠乃小笹風さて吹き物乃咲残霧代

らひとあるハ庭乃かひもうつことらぬハ池乃鏡を
山嵐をゆしき時をいはく池をくよあり
田をつくよつの玉川氷　結ひ初る庭乃池を
とりうことくひ庭のかをとく　氷をくのの海山川
池をさへく嵐　又流乃氷も結ひつらぬ水も
吉野くこほる　瀧乃白糸も池まとはる
氷乃たえぬ氷　氷をとくく　嵐なる

名残ハまた那しきぬ外く霜をきくの花ぞ咲らん

氷

かとよむひとハ庭乃池水もこほり初ぬ水鳥もよ
ひよあさく夜よしつく絶なる乃声を名残ハ鈴
にころく芦間く松風乃たゆまじむひまハ
川ぶによせてたつのこのちくやまの波風
坊ともすハ乃水流乃くもあり

川こほる　月より冴る池こほる　岸ちかくより氷初
川音乃ゆきむすほゝれ　うすひ乃下ゆく水
いとゝ冴る　なかれ一筋来の細ふし流れもたえ
岩にかゝれむ川舟　池乃ふちさえなくて
鳥乃つらゝの床にかへ　池水乃鴨のうき寝
氷る袖の氷　なかれ山乃氷　名残氷とけ
氷りてもゆく水

冬ふかく乃氷とゝめ時雨て岸水のかたへの池水
今朝ハとけ氷初る岩川乃岩間の浪乃音もたえて
冴る夜も今朝や初めし袖もとの泉
まさに池の氷乃下をくゞる水の音かへ
今朝ハ岩間乃山川乃岸の橋をこえて流れける
しかも山川乃岩間にかくれて
風さえて乃川の淀氷きえ乃瀬もなく別

此ころハ氷をり結ふおもふ乃中秋のさまをもしのはん
芹川乃氷とけゆくへしらつんあらたの紫きえ道もなし
おもふ乃霜林の池乃さき花に雨あまさ乃渡りを流

氷上月

氷月ハさえゆく風と道とて流るる水を秤とし夫より寒
来道なりけり道乃やとりハ見え世くもりて見えむ
乃雲もひかりとしのにあり池乃秋の氷も月乃光

にこりなき道とをもと霜乃月も月乃光見えし
さらひ又雲のまに隠ろひしは末乃けふれと
ゆく月流まさる道とをりつる月流氷る道乃波の
月にさえて霜月あまり乃上のさき雲嵐
これは月影山乃上にて月霜よこおもふ
月流月にさえ小夜あらしこゑ霜に
うちもとさ雲山乃とめ雲よりける秋

乃涙よこほる　霜稲葉さしまよこさまる　流れきさ
まくまむ月　月さむき夜乃寒くさし　月の
こゑも風寒さまる　野さも山も冬さ真さむくきを
む月　冬真乃露入紀る紺にてる月　雲のまよ
浅茅か庭にすむ月　月冴えすての川　大空
乃みそりも寒くすむ月　冬空乃霜小てる月
真砂まこほりる月流　雲井に冴る　白雲乃よそ

ひとつ松まさまる　月よりこほりる池の　波乃おとも氷
てり川る　山風も秋をつくさむ　むつ久
名所　秋　月よめるせし
笹さく水乃岸辺に見の露乃ひかり　月の光　まさりん
白妙乃光を添きの露乃　月のうつる小雲はらら
野の葉に濡れ　西に山風よ秋霊の有明の影　さき
暁乃鐘乃音きま浅深秋乃月の影まさる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千鳥

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

越してちかう八汐乃ゝ川ゝ附そくもうくよう汐
乃記す附あきとさより渡まそひくせうくの之
浦ちより 停し 名し 名渡し 磯し 川
し 濱し 村し 松し 友なし 小松し
浦乃とつゝすなし 浦をきゝ 浦風より
八さ紀くそく 浦なく小松ちより 内にを
つゝ 浦しうちゝ 有をよ浦つゝ 浦の和歌

なくみより 浦より おちにあさうよ 綾すよほ
磯ちより 汀し 縁なしにさ川し あむ立てる
きゝをとつゝされ あまの衣ぬきよ 没て八汐宮
ほなく 渡乃うきゝ〇をまそ つゝふそくのちよ まくふ之 川風
衣をそふくみより 川瀬乃渡よ立し さ雨よ
乃経覚の し 松なし みよりうひてかく 雲鈴
立い船く 八千代となく 忠所うにく渡

さゝ海乃くもらぬよるの月よ 住吉乃浦 松風ともいふ 大しほ乃海
松かくれ又大かくのしまてなくとあり あまてらし
大かくにハらしまの乃くハえんあり
末の露よ霜をきて 月しほ 松風波人い 波上 日 志賀の海
しくりんよすあり なくなくにし
志賀の海乃 又井乃さし おほ川風 人日乃浦 名に
たかりにかきて ふきい
あらしの浦 浦風よ 住よし乃はま 波 浦そも乃さき 難波
若の浦 しかまの 二つんき 有さらせて なくて又日よりも 大井川 いつて 宮城
川 もし船あるき あまの川 かもの宿 いきの宿

波しろき神乃社と乃風をひらきさへしてよる 月影よ
いつく浪と立い宮浪なちくり波乃よるも姫なく
浦風も霞をならし多能さて氷汀にかゝる浪之
出羽又て浪やたらし乃瀬もなるなきに故乃きさら
浪花の風吹しくよハ乃浦かゝる波乃立出にかくきくらへ
又なる妻乃川瀬の波を著さてきゝかつ月にかゝる浪之
松かけ姫きにあへて中にかゝる波に霞の千歳 こゝろん

文ゆふ川なたの月みなるゝ所あきさえて浦風をなく
りやましにさらしたる乃漁ちかく舟遊乃波にあきさて
夜ふけて浪より磯乃浜ちかく浪にあふ所の浜之
志ほ風も文波るる夜なくてみえ所ともるにみるなく之
さし浪都之乃浦風吹かさしうちて月にみる浪之
波風も夜更ゆきけしはおとつれ波のこる乃浜にみる浪之
波よる磯乃こまかみゆ中都を子ともひすさる哉そる
所

なかなか月にきえし所く都をしきまつ乃波のたつの
ほつくし
おのまさにさひも二人中都のる上波乃しを子に浪
之と
こまち枕ともさむさをと浦風よ夜をさそひてなく
る所

水鳥

水鳥ハ鴨をしふ浜なるあさとあさ乃むれるすつ
乃むれ鳥をしるるハ夜をさて上しちまつ乃浜あた
浜ひひをたまあみにもらひこし浪うきねとうしと

山も鴨乃をしつひ給とも八ぬる之鴨乃あまた
いくハ杉乃内に緑之乃もの乃まとらえ鴨乃くまあ
あさ川なふむきうく揺御とハひあさ枝ハ流て
池乃氣色しひあつまかくきみハしむくも
池の外とちあまハ水ふかし松波をあつくらく
かしきらひ池千につらし奴をしも氣にてうきひ
くり鴨よきえて松氣ともあらんかく時之

鷺八 流つも女い おし乃むまうる そのまる乃を
し乃あつて 池すまさる乃 おし をし乃
とも立氣 おしうとう乃むまく おしの氏
まいとし乃あまま乃 おしらのう何く池ちいまく
おほひとしかあ
なるこえ 松氣をうひてかくをし 古来をいし
ゑふ おし乃毛衣 池のかよ衣かまさをし
さえく杯鳥 おし鳥乃小枝のくまる 平郎

池なにつゝひを解題をとことく葉深くとも
ひろりねをみて八穂乃根乃者をも汁など
気むしなあり
鴨八鴨乃菱葉に霜なる乃かくもつ
流りより鴨乃しきも あしもと乃さうく入江
つらとのしまる 芦間にあされ食を求え池すに
波さてさうく あしもと乃蛙つひの露くまね

と云くなく鴨こそめくりあ あしかと乃さうよ
つらは波よむ道入あしかも 入江にかくしき
ても沖乃しきうと まとのしさ兮 其外
鴨八うき乃 水くし池江沼沢まもあり
鳴八こう河しく鳴る ますく鳴る鳴乃下江
あち乃むしる あちむと耳よあり多兮
むまてらる 仍あち也さうくとす語

水をたゝへたるあり　わたるにもなき
なかるゝ鴨鳥も立て　水なる乃つらゝ乃すかた
すきまにも　つらゝの床上同　つらゝ乃床上同　むも
あり
乃夜上同　蘆のかれ[illegible]　池の[illegible]道て乃入
おち乃つもりかゝるよ　水なる乃つらゝ乃とこ
水なる乃下せきのみ　なかるゝ乃いはれさ　鳴水乃
せき　水乃[illegible]　池水乃こほりなかれゆく

名所ハ難波江　[illegible]　志賀乃浦鴨とて花仲
にほの床とよあり　[illegible]大井川いせき乃浪きる
このあり　[illegible]乃流れと[illegible]
宇治川[illegible]川　[illegible]の川[illegible]
乃渚池[illegible]　[illegible]乃浦に　床乃[illegible]
[illegible]乃床乃　[illegible]乃[illegible]乃湊
[illegible]　[illegible]乃池[illegible]
[illegible]乃池[illegible]
[illegible]乃湊[illegible]鴨　[illegible]乃[illegible]　あさ[illegible]乃[illegible]芦

さゆる夜乃氷とぢたる池にうしと乃まちかねも霞や
をとらん
まてこかはつのなくなる乃結ひ年わか夜の池の
池水にま置てちりしるなる乃ま風に波や立さらん
こし秋乃錦織る川波よりうてよりかしの色長
さゆる夜乃霜を置くそてよりなる乃氷を冬を乃池
ふる
さゆる夜はいくしのしけきとにものをさりし池の
芦も
芦も氷はなかのつらゝまとも水こもと枕氷る入江に芦も波

今朝ハ又こほりぬ波や のこりえ芦屋にもそ池乃なかる
波さゝれし浦風はしと立る乃関守かお乃なかれ 氷く
こ通ふこと出て思ふ官芦乃も乃まこそるやまくも 上夜
さゆるよハ下まて水ひしもさはり池のおもる

霙

霙乃雪ハまさりかしもかつそたちてもふりにまして
かきくもり荻乃葉ゝにもうちそゝくま風にかつはかうも

枯乃多のさまも川ともに梶乃原よりなる

河辺乃方に落けるさゝ波よりやの波

ひさしに音なきとも人の魂さしの音よりなる

れしなる乃雨日音さゝる(?)あらん寒してあれ

乃光ハ朧月にかゝ音もしき瀬や乃河波

秋の河辺さ荻(?)も絶えし 風さして河辺

かなれ かし乃さ辺紫(?)にかなれあれ雲

昔より一むら落葉 あれちゝ山風 村雨の

羽風も騒ぐかる河辺 河辺の木ゝに村雨

よきゝもれあれ辺意川 風さえに一むら落葉

あれ辺かれ雪百乃鳴 玉笹乃上にみゝる

庭乃上にちに乱る 山よりむすびし姫る

秋やの上にあれ辺 伴ひける あはれて ひたかるゝぞ

乃枝やよ音に川れ 里しや乃都よかれ音

あづまぢのはつかせし　萩もゝちはなる佐
月乃夜をあらせ萩がはなる萩にそ
きえぬ　氷乃上よする　玉あづま　名所ハ
まかきのふもと　かすかの宮ゝ原みえて　ねなし乃笹原　の彼乃
志乃はらし　なほきの原　あづまのしほ
むさしのあつま　玉川乃里　かのあつまの玉川のわたりなり　吉郎
かのあつまハいつも乃名所なれとても　亜飯丸

松乃枝をもとに迄るの国乃しとなるまゝ露
浦人のよもすから見しあつまかたに　傍乃まきの風
風乃音もあらし吹入る一村乃露萩
風音こゑハ雲ゆくかせの通ふ夜ハ　波
うつゝてい露乃下萩乃花そうつろふ道
あつまのかたに風ありて　あつまのいはやの笹原
人ともにむつ門をさしてあつまの袖ハ露ふかし

石橋ハ今高林山室にて乃松あり霰ふるといふ
ちらし待る夜人のあられ嶋乃霰の音乃おとはらはら
雪乃上の千鳥乃肉も涼しくて音もなき霰乃玉散る
ともなく千鳥の翼の霰乃音ハさらにあはれなりきこえ

霙

みぞれハ雨まじりの雪なり空も雨にぬれつつも霜に
なまりハ霰にさも似て寒さもとひふり乃音はく

霰くも又ハあられ霰まじりのあまハ立根
にハ雪溶けてくるしききをさかしくさしくて納涼
きこゆれどかりたてて夜あけなきまでまさなり
今宵の雨もなにと詠へきとや
風まじりにみぞれ乃かよハ春乃山の雪けぬめり
雪ハ雲の空乃雲の霰乃ふりくれてをそこそ
山風や吹きあれて雨はれにまつ乃霰を添
ねど

渡せる竹乃もと乃筏乃下ニても我くるゝハみな歌なり

雪

初雪ハ以哉をまちわひて清む雪は欲乃内に
して世をまして空なるハ深さしていひ冷く
勝しく見ことまるんをらひ形しも山も皆白く
にけつゆるろ寒乃はしきを世覚し 夜の
雪をも人ハみなまちて待つらんとをもおもしき

積る雪を花にまかふ一夜乃雪ハ有清にま
て松井乃雪ハ都乃春のにおりほき越路に
ハ去年しの古根 雪乃あさきを初に 流るまほをさし起まも川
ゆきて新ともみに常人ハさりにのうち
さかくなるまに玄方川雪ハ雪乃ひつきて始
らんとてハ家にかりあら宮乃消にし 又
宮をまちたる流家にてをとらむとまきハ深雪之趣

してあらたに風情ありて 其川のにならん
紺青ハ 都もほりし風まさりて今の紺なり 紺る
なり 紺くなる川紫 今紺またに横さるさ
かりも浅めしぬ 霜のやうにて子木乃まろ川紫
墨ハし重うて 黒ににかりそむる 今紺紙紫
古山遠よりの紺る 色の遠乃黄葉ほり
あさ川紫

浅黄ハ大神紺紫に出しより其命冬れ
乃黄葉えも今補ハ川みをきぬん 庭の萩
紫乃紫子色黒しともふたさ 住多まぬ
花も時よりハ絶ぬ下しうと 竹乃紫もなひ
うぬ本かる紫しもと
深紫ハ 紫まえて人もうつぬ ぬなまし
藤くもし川のもく 松乃紫ちか遠 秋乃紫、あ

遠　新より高く流るゝ雲（嶺ちかき雲／何とはなしに）ミ庭乃うきくも
し川ゆゑく　行人を経てもひらぬ　八重なる志
うつる　なめてまつ月へつもるうつ都さん
流るゝ雨る雲に山八のらんにつりうんとこ可り
峯の上乃空の梢もみえしすらぬ
横雲ハ深雲にわかれし
山雲ハ　山松乃梢を流るゝ　松杉乃梢も森

山乃端なる川ゆる　かゝりつゝて山都なる山乃らく
麓のりにてまつとかりはゆゑ　山深き所の色
雲に川ゆゑく　まき乃八志ぐり浮雲　八重
山きとかり川ゆる　雲より起る絵　月にこと
まうら一叢乃雲　月をみつらなるも乃雲外
嵐吹くむら之へなるも乃雲　山なるこの端より
上に流るゝ

上にうつる夕暮のこすゑ乃雲　嵐まき
帰り住む雲　岩根も見えと隠つゝ
野辺にハ　柏のをと埋もれし雲　立そ乃ゝまる
かりかくれ絶えこめ　雌鳥乃雲　雌津乃
松もうつりまさる　雌鳥乃さゝやかにうつりゆく
雌雲たちなほもみしまぬ
冥雲　出会人乃ゆきかくれ川に　読さゆる亡魂

路乃雲　雲にかよふ聲ある冥乃戸　雲より晴
冥乃戸　雲分ゆく　誠冥路　雲霽る冥乃ハ
らや乃あまり乃
路雲　行路雲ハ旅人乃かよふものに山雲
越来りしより白雲　隠雲にまよひけるも仮
隠雲に見えしらぬ夜もなき人乃秋よりさえに
流川にうつる　雌鳥逢雲にそへたる旅人乃

乃あさまよりさ川も
海邊雪八 雪になりけり浦風 雪ゆきまよふ波の
うえ乃八おもそもこきへける 雪はれる磯の松
原 泊り舟乃かりもつきぬ 浦乃しほやの
白雪 八十嶋をかけ清める 渚宮 海になれさ
もやをぬ みる雲になふ をまとふ 清り舟 あき
につける白雪 海士人乃しほくむ乃も埋まるく

磯山さむく 波のみ 波かけて雲小嶋乃船
雪たえうくく 浜乃しきこゝに 浮ぶ雲乃波
こきた浦乃千川
孫不雪八 風絶て 都乃松に 清める 籬乃
山に流のみ 庭乃雪に 絶いるふ 四人に絶
いとしく人目もうまて みる清のみ 猶や
乃とも雪乃光を志ても 庭乃雪に絶も

いときなき人まれ　新乃竹の雪、おもする　新乃
松乃雪おれ　窓にあけぼ白雪　甚称
冬こもりのあまき雪　ことさらし梅ちらき
たまりて雪　ふりちる雪　雪乃選ん　雪乃夕
積　せいの絹　緑豆に　表乃白雪　雪も表　まとの
白雪　雪まの雪　雪色乃夜　とにたけ　夜ます
つもらの雪　白きなる雪乃道もし

名所　八つらの雪山すきとよもて
越乃雪　しきたん　きよめなそ　ふしのね　このこまの時　きぬ雪なとく
都乃ふし　ひへの山　とりよ　ひしのね　よしの山　雪の会　のくよ
こしの山　さいひの　東乃かつ川　山に　雪乃　つ返つのかけ
松乃梢に　ちきき　ちしう川の雪ん　ふむ乃むさし野
をたあり
さしぬきに　山乃しも　てくしみ　ことの　野つ乃くさ
むさしのにいしくそ行つる里
是非乃一颗の花よな鈍く入れ数ちて横白雪

吹すさふ嵐も枝にまかせつゝかの海なる松の白雪
神宮
深かりて乃月は更けて又やまんまゝ讃え今朝の袖の白雪
さし衣の嵐も志らく今朝を松は枝に残る庭の初雪
深めまたなをそしくてもみん庭の面に今朝猶なく やまさ白雪

浅

かり初く世を流めしは是秋に白き枝を雪に見えん
今分水せしく是はまさ乃月をまた世に浅雪れ
枕もまは雅の雪に見ゆるひ夜人の浅らん乃

深

冬ごもりつまでも社は松竹乃なさけは落雪に深かり
晴年寝日数もいくらあれて深く雪のふる庭ぞ
ふる嵐のかり深む雪にて柳の枝も松の色を移まして
きのふけふ流めるも深き庭乃雪に山はいくへと分まて
うきり深きは深さふる行の跡も人ぞ庭につもる白雪

後

降つもりてとひえ人もなりては中くいふ庭の白雪
夜はまふる猶もふりはし積竹のふして今朝の白雪

横たはり一村竹乃よの枝にも八雪乃山家かな　其定

いとゝは今くも立らしあれ山家とふ窓の白雪

そよ嵐の吹乃枝も咲みぬと心あり雪乃曲　收

苔深生松乃こ末もふりつもりて山ゆきつもる白雪

山

春乃峯松乃梢の音も世は山都路雪乃夕　兄

冬来ハう風寒し波手小舟と海辺乃山吹の雪そ

清くハ山の中山乃雪と流て詠れ清めし雪その（れ）　かね

野

これよハ春とて野やのし人の手とふ乃花の

清の里桃花の咲乃若草乃名に桃そ清らの野花の白雪　神霊

里

秋とハ今乃里に人の雪と今朝と春も見しの

別ても秋乃秋の日数まて清の里かゝ雲乃白川乃せ夜　里

路

旅行むも雪路の代わ行かは春の空乃道路

朝可な旅里より夜まで乃雪路ハ路乃夜もおしまぬ

浦邊

こ川の里ぬ烟を春の音まで雪に白き空乃浦　士人

浪よする波もまたくて白きを見れハ雪乃あしたの
春風よみちく波とみゆるに雪をきくの浦の　まさ沢
為和
山かくるゝまきのたつねハ庭乃雪に之て見あさも松や　まかれん
絹の衣の外にみる遠てたえや友かけもさくる乃前
君か代ととしハまた心にも絶ゆくいとまをきく雪の　山陰
松上
かりくつ乃今月もよくあさきよ乃雪にもかく前の　勝さ
松乃下の道とって波かよ乃池つゆ見乃まさ波

枕
逢坂や深山に雪乃絶間に松乃心に枕乃そ流
紅葉なとも別れ白妙乃雪をやまと乃雲枕　村
為家
思ひ雲乃峰より乃ちるの人枕乃夕乃さき乃跡に
晩雪
冬さえ見ゆ波乃上にゆくつゆの洲乃雪を白　雪
冬もやまれ白妙に深て年ふることもなく雪の風
鷹狩
冬近乃若葉も色のまかり見ゆるとこ里をゝ見こそしと文

かの書にしるし侍乃さうしを見ぬ人又あらねつ
まつりにし年乃日のうちに勝手なしむすたら乃ぬ
乃書を奉りひめしも　かの書にしるし侍れみぬ為之
像書に白文乃たちの文字をきて世乃ためを奉よ
う進すらうかくきしこそ　像書にたりの字す
又ぬ　出さうつきくに調書　山乃また　いとまことに　引き出す文字
ましるまうかる書　自よりなるとまうしれ　くしたかの

志かし乃まゝで　はなるしせこ　よ候もたすしぬあり
たゝはしれら乃とふらひ處ころ多風こそひまる
清らまさ乃母さとむかう人　まじたゝ乃ちる乃宮
をおもしぬ　入口さえひ多うの小路　今一たりと
きもとたらう人　うらめしうさ竟乃化　うら人も
あまたを契りしうる　ことを通にぬるしうう衣
名所八　ここ賑　ここ乃ところ八とまり　さくま　まことしに　うう鮮とたりしげ

すへてこ庭天川よしとなかせ
よそにつゞれてこそかりよのあまのあまのかり　なかしの露ハしくちの
こ川をきの露やさしよのとき　来む火乃焔
かる書にも恐れ書て候をし人乃相(おかさ)嗜乃　絵の名に侍て
絵乃書ハ人見ゆる書きしく人乃書きす手書かさま
みるのとき川かる書にても見てこそもみれ哉
きし人乃書しの絵の意かくの名よりてやさしく偲え
筆てきの大乃かり衣田も名あるよ神をしかしませ

また露にんつをてやさかり衣風も言の葉は待ちに
うち紙今下りしき書や書かなる文名乃蔵書
また平生さ乃への山のまよりの言の後やさとそ乃人

衾

あはれまた夜鈎の母衣乃あ川かまの後あさて
小かまの後かなる物ましとりて八衣備またれ
ハむさかしいつの乃。名のまよりてかへりとなん

歌にもよりてもさしもまなくともなり
又ハあはれ海の月にてハ和歌にも未定
よしともいへる 引つきに和歌も読む 海も
まのあたりに月をながめ ひろうみのまたにいつれ
あきの海 光ひかりよせてよめり
きよ月の夜とて秋の長川海月にてよせて
秋の月かわ月にたる歌ハ月にて待し今夜ハ

椎柴

椎乃葉のしげき椎乃葉ハ冬の人せいしてみどりなる
よあり式ハあしまの立かたるまたまの
うつろ秋又ハ雪折なるひつさうなし 志かき
乃ものへ殺志くまることもなりたる 志らしむる
続まなかなき 河にかけひく つ海床にはて
とり行む 雪に於きかた あしきかたし 来

冬さむし衣ハ金とも錦しきちこきて路之ハあら也 吉き哉

白河の山風よ梢しハ乃枝ハなきれとそ さハ数え

三山しハ吉乃か海之えとりも金て錦き出る梢えて之

薪

雪乃中道ハとりて北山よ来よりかゝるこゝりにほむ

よしの四季中とめえつる薪なき道に薪と以て歌ハ道

寒しハなる吉川 吉川乃雪こそつ摘さまる 雪

おちこち山しハこえ 志バおりしく 三山乃志で

をおりくつる おりしく葉 名所ハ小野山

志ハしハつまま葉 こしのおし 志いしハ紫雫

名に流よあり

網代

網代ハ氷魚とりよ網とよみ流よあしろをとりて網代そ

川口よりのぼる氷魚乃ま中にへこりて夜ハ 宇治川

らゝ之あしろ乃宿とりふハ網代守人のすなりて有

唐之網代もる人を網代もりともあしろ人ともいふ
あしろ乃布といふハあしろの中に簀を仕懸のれ
にしてかくれぬところ中に入るひをとらふ
網代乃末とハあしろ乃末にかゝりたるハうへ
火をたくひをの火ともみえ文治うりの氷
にしる網につきてひをのあつまるも
木綿にかへて波にうつる火にあしろの網を知

宇治乃網代 網代にてあしろ守る 霧 紅葉や
まつるあしろもりあしろ乃簀に霧さむる中
甘日にひをのかせまてこ 卯月乃あと波
こえ ひをの瀬る 紀の川乃ある 至卯紀をゆ沢
山路氷魚をよせくいふ之 名所ハ宇治川
あしろまかせ文波 老人まつる よしの川いさ乃
くらうかしろをせく乃あしろ取る 川ゆかず
落る さなうて川 中のせき 川

うつ火乃なきこともすむ八氷をのせる網代乃種をといつ
こゝろは
乎のれいさよふ波乃音ハしてこそ数ハ宇治のわたり
白きを世に乃あかるにまひ遊ぶ中に氷如り
あらそひ毀乃人乃さとこ波ハいつこもあるまて錦を著く
宇治の篭をさし渡乃田上川乃に網代ある舟を
おもひきつるもり袖を寄しうつ火乃影も見え
そらの網代
舟よせ流乃川風さえあるまの袖をさす遊ふまゝいくか
あまた

うつ火を猪なる元網代ハ宇治川乃夜をよれく。

炭竈

山乃奥にハ又八炭の窯穴をほりて由をもやしてたき
をまた人々山炭を中とし乃うり乃立の煙送るは
をかそより乃来る神をよむ之こそまの乃つ
よき炭八宮のうちも立てり増もし小野山大原
名ある名所之或八宮乃松乃本をうり一也と立

のあるなりもとこ吉乃山の網されらとも文
ハなかり乃末ハ雪けの乃のよ中ともよありなん
春は清きを子ハうにさ遠浦もし 帆本なり
川辺 末乃かに浦ふる なかり滝しまさとに夜
名月嘆しく山嵐 ん初そくもさ川に舞り
雪なりにふる 一のとに金さなのみに舞り 来し
とこなるここ中支 麦を御に中まとこの夜 嵐

中嵐乃名舞り 千那出とく中きこ良 ま支乃嵐
う夜 松乃出てこの夜 名示ハ 浦くしも松乃夜
むこ山まこ出てこ 中支乃ため山
山よよのり
すこう夜乃網なしねと世乃中ときんかそと立こなれ
まこう夜乃なりの里に浪の空くも大かなも支ま山
滝しさハ花を増すらし大からや中とこの夜乃網乃にして
嵐夜乃網なとこまとこみこ松乃なとし小乃山里

よそまでも淋しとかしも大原や烟をたえぬ山廉の里
烟のみそまり川あかしからしも老ぬ松かけお家の炭竃
時雨ゝ小野の里人炊もえぬ世の炭竃の煙りにも月之
美てけりとのきさゝ知りまあかし小野もとの炭立
絶せぬ小野の山風都かな残すもの炭の里のこうは　ふかりハ

螢火

きかき秋の夜となり螢火の光のあきらかなるあさ

それハ春の花もときも海きハらづき火の浦く
神前よしつゞきて火の影とハ上またたる尽や
うきしの冬さこそふ小野川とかとを
浦と火のかたにさらし消ぬえしのせ
しの影すみえにそしむさるしのあすとめ
とゆきまろえしのあすとも隠るしさて夜影へ
しのすくしあまり　叔深秋やまつきハおこれ

小夜更てさひしき吹おろす風 浦ちかく
にきこゆる川の火 むかしのへこひしく おもひの外
し 我こゝろ 涙とゝもに 我身
のみ 山里の秋しるる火 埋火にしるしもなく
まさしきものを
昔の花を思ひて 埋火の消せしを悲しみ 給ひ
いにしへの灰の下なる埋火のつゐに消て月の浦わ
はき

おもひやりの末にこそひとしや 浦ちかく 嵐は
いつまでも我さるゆへ 浪の花の散もとを しも
この夫は秋出る人の人の秋はつ手くちにはゆく
下にある秋の手くちの消ゆゆる 浦
埋火の下の心は誰にしりてか消はかなき
桂の花の春をも花の風の枝に残す 埋火の
御身はうき世をはかなきものと思ひ 秋の

神楽

神楽ハ公卿乃衣裾乃中に鶴乃紋之文様あり
あまてらす御神乃岩戸に入給ひてまつりしより
神楽ありとこそいへ鏡をかけつゝ面白き事に奏る
うなゐ榊乃本末之人々乃打つゞきてうたひし
さかき葉にゆふしでかけて誰か世に神乃御前に庭火乃
清も焚きにきよらなる文ハあまたありけれ

てらしきたまひし家人乃立つ手袖に御茶をすゝ
むなど何ともいひやる榊葉ハ八乎とくいつ
乃人長ハ舞人をまきて（袂中より出）乃衣乃袖を翳して舞
なる庭火ハいかにに神楽うたふのれ榊を
にあけしと庭火乃光をおもふ事　あきらかに
すらひたるゝなど　庭火ハ月乃影にも見
ゆるも庭火乃清　庭火乃清よりひくゝ

ひさ井乃ゝ庭の神楽ひ　人まゝし衣乃里ゝゆて
ふかく元にしまめ竹乃葉の月もえゝゆふ　神事に
神代よりこそ衣乃夜をくゝ神楽乃人も林哉
かり飾て古事乃庭の月数かゝなふ声も　さそうに
わうたちも拍子夜揃へ衣乃月の光かな
をく霜よ白雲ゆかく神乃いさあそ乃かね　かつの人
ゆふへ寺井乃庭の神あそひ糸竹の声も月に住

佛名

年乃暮ちの導師を請して三世乃諸佛乃名
をとなふることよ乃佛乃いふなき唱ふ事ハうれ
しきもあることゝのに消ぬへしなとよめる
ゆへハ古乃とへ人名乃うたふかしよめり消へき事
はうも消ぬらん　法乃師の〻いたま乃うちゝ　仏名の信を
さえ請すをらゝまきて　ゆきふへ仏も仏乃いふ名　三世の
いろゝ

仏法乃師乃をしへのまゝ　行乃ためしひ所
とゝのひをもちる三世乃仰のうち乃知くなる
よ乃内よ法を通るつく八清めん三世乃仏の御名を
とゝなへて
と見て八仏乃御名の称くよつる通る身乃つくも御
かなうて今も法師とめん世乃とへ名のうすしも
あ流らしひ行乃よの穴かけてそみなよ仏乃名を知て
うつまれ
一よ乃をつ聞く善人八こゝにめん三世乃仏のよ乃のきに

歳暮

さ流しはやき事なくてこゝにも通ひ来る筆を
なりまさるむかしハやまとと云八さるをしるもまをめ通
ハいろく通ひめくるをしひ春の事八嬉しきのをり
ら通れ年乃暮こうハおしすま通てゝきくよ
せひつゝそとこときこゝへ法音に耳をすまよそく
ゆくこよ年乃暮をくれんく志すを年乃暮

こゝろ於山乃かきよ於さひし世人乃い
そく古も年乃花にうき香てさすらに
人のはし越しても乃年の学凡へ学者を
まうみしき道を紙ハかうくはくとしを
年過ぬる事をかくしや年人をなかし年
所てらやつ人道月日乃つもりきて年乃道
ぬる事と今文ハおもはくしもさ　鵜舟凡湖

也かくきて日　立もとて知ぬ年ゆくて　子も道年
波二世る年波　よまうく日をもし　はく所くも道
月日　今年もくてくく道とけり　春秋の花
こうふは世る　一年乃道八夏　秋冬道ぬる年
乃道ニかきうき月うく　知らしくも紙くは
書とつ道る年乃道　送むとふる年乃道
以清く茶凡まも所く年道ぬる　年波乃末

なきも千流く　去年　梅津は雲も年
乃をたり去りまてく梅ひしく　つ人をおきく
まのにはなく年乃をころを志らん　おく遠

海辺

行年をおしまのあまのぬれ衣かさねて袖に波やかくらん
を乃波たちこる舟をさ衣かさね今年もこえぬ末乃松山
いよ海かた今年も重なくし波世乃てて流るよ波まの

関

清こる寛ける波も重て行年乃をころをいへてあ　とき

あさ月夜ふる年乃をもおしきくれおしき年の　紫式部
のみにて　私しき内も好人はあれしを重年乃なる年
いらさるをも月日はとりて去年あれてあし注ぐ　乃を式
二年あらん蘋乃名残して重む人人をもおしらく　蟹
寒乃内よちのひ除行乃てし乃除ハのころなく様
いらにせん宣行年を去年まし舟を給つもハ来と

除夜

抑有職之一年も今日にて過ゆきし之歳暮ハ
世の道の心ひかりひ又老よや乃心をよむへし
老よや八識らの心なりてハあし今日は通ゆき
人來時之　今日の事と重ね年　御日乃寒
手向　今朝よりきたる　年重行乃一歳年
手出し松をいはひ飯をそなへ年をおしとゝめ
御より八春乃神を祝ふへし　年中の事をまて今年
暮れ

一年暮らし長ハ之新た物はよりの今日算すへ下さ也人
日は中とくおつく暮る婦人ハあしたに今年の年を迎へ
人ひと花漏来へそこうつしを過ぎてへ今年を迎ふへし

深川選